

## カラマツ林業等研究会設立 30 周年記念行事を開催 —記念式典・記念シンポジウムに 400 名が参加—

平成 21 年 1 月 21 日に塩尻市「レザンホール」において、カラマツ林業等研究会設立 30 周年を記念して、記念式典及び記念シンポジウムを開催しました。

当日は、当研究会の構成機関をはじめ、市町村、林業関係団体、林業関係者など、カラマツ林業に関心のある多くの皆さんの参加をいただき、盛会裏に開催することができました。

### 記 念 式 典

記念式典では、当研究会の経過報告として「30 年のあゆみ」を林業総合センター片倉当所長から説明させていただきました。

また、カラマツ林業の推進に功績のありました 6 名と 2 団体に感謝状を贈呈しました。

表彰を受けられた皆様には、お祝いを申し上げますとともに一層のご活躍を願いたします。

**表-1 功労者表彰 受賞者**

受賞者	氏名・名称	主な功績等
菅原 聡	(松本市)	カラマツ林業研究会の創設及び運営を主導 県が作成した多くの林業技術指針づくりを主導
保科 孫恵	(伊那市)	カラマツ大径材を生産目標として、疎仕立て施業の管理方式を確立 指導林家として、多くの林業技術者養成に携わる
松本 武治	(長野市)	長野県信州からまつ工業会理事長としてカラマツ材の利用開発と需要拡大
前島 英雄	(茅野市)	人工乾燥カラマツ材による木製サッシュ開発、製品の製造販売
平林 茂衛	(上田市)	県工業試験場開発のヤニ処理技術を応用したカラマツ材の脱脂、カラマツパネル工法住宅の開発
田中 昭三	(波田町)	県山林種苗協同組合役員として、県の苗木生産振興に貢献
佐久市 大沢財産区	(佐久市)	NPO 法人と連携した林業講座の開催、企業との「森林の里親契約」の締結
信州上小 森林組合	(上田市)	高性能機械の早期導入と利用間伐への取組み、地域材供給体制の整備



写真-1 記念式典で功労表彰の受賞者

### 記念シンポジウム 「カラマツ林業の足跡と今後の展望」

#### ◇基調講演「林業と地域再生」

講師 川上村長 藤原 忠彦 氏

かつては、カラマツ苗木の一大生産地であり、カラマツ造林の発祥の地とも言われる川上村の藤原村長さんをお招きして、カラマツへの思いと村づくり構想について、熱く語っていただきました。その概要を要約して紹介します。



写真-2 講演の藤原村長

#### ◆川上村の概要

川上村は、高原野菜の産地として、全国的にも知られている。農業就業者の平均年齢は、50 歳未満で、後継者の平均年齢が 29 歳と若く、農業所得が 150 億円を超えるなど、基幹産業が農業の村である。今日の農業を支えてきたのが林業で、農業と林業を一体的に考えなければ、地域再生はない。

昔の川上村は、高冷地で米の生産量も少なく、自給すらできず、出稼ぎの村であった。村の資源である天然林のカラマツ、サワラ、ツガなどを切り出して、細々と生活していた。

#### ◆苗木生産の生い立ち

村の文献によると明治 26 年代にカラマツの人工育苗に成功した。明治 26 年頃に国内は元より、海外へ輸出していた。朝鮮半島(北朝鮮)の他、ドイツ等へも輸出していた。

戦争を中心にカラマツ苗の人工育苗が始められ、日本一の生産力を持つまでになり、苗木づくりで村の経済を潤していた。

我々の青年時代の 30 年前では、30 年経てば金になると言われ盛んに木が植えられてきた。

戦後の緑化運動により苗木を提供してきたが、造林の衰退から苗木生産も著しく減少した。

#### ◆高原野菜の基盤は森林がつくる

高原野菜を始めたきっかけは、昭和 25 年当時、朝鮮戦争が始まったが、当時は、野菜の輸送(冷房)システムがなく、夏場野菜の確保ができず、朝鮮半島に近い川上村が野菜調達の候補地となり生産が始まった。その後、戦後の復興とともに日本人の食生活が変化し、野菜、ビタミン、タンパク質等の消費量が年々増加したことが、高原野菜を伸ばす大きな背景となった。

高原野菜の産地をつくったもう一つの要因は、土地資源があったことである。川上村は、明治 23 年に合併したが、共有財産の全てを新しい村へ抛出し、その財産を旧村、個人、村有に 3 分の 1 ずつ分配した。野菜の需要増加とともに、里山を切り開いて畑にした。その面積は、1,000ha 以上となったが、土地の確保は、売り買いではなく、分配された共有地と私有地を活用するなど、恵まれた条件で規模拡大が行なわれた。

川上村は、大地主や小作人がなく、平均して 2.3ha の耕地があるが、森林が村の農業基盤をつくったもので、大変感謝している。

#### ◆カラマツ林業の歴史

元々、川上村は信州カラマツの源産地と言われ、材は善光寺や江戸城へも出したと言う歴史がある。

カラマツをはじめ森林資源は、いろいろな面で、社会に貢献してきた。40 年代は、カラマツの相場もよく、村でも公有林の整備は、財政面からみ

ても林業は有利(銀行金利と材の蓄積量を金銭比較)として植林を進めてきた。木材価格が低迷している中で、4,000ha の村有林の内、65%がカラマツ造林地で、50 年生以上の森林も相当量あることから、なんとか木材を使おうと考えてきた。

#### ◆公共施設をカラマツで

川上村では農業収入も多く、家を新しく建て替えられる農家も多かったが、木材は木曾ヒノキ、秋田スギ、吉野スギ等で建てられ、地元の材を使ってもらえなかった。

このため、村の公共施設は、カラマツ材を全て使う方針として、取り組んできた。

当初は、建築基準法、消防法から使いにくいところがあったが、使えるところは全て使ってきた。

中学校の建設には、財政面や教育的観点等から、伐期に達した村有林から調達した。

○カラマツ材を使用した公共施設

**文化センター**・・・内装は全て木、ホールの壁はカラマツ 200 年生の国有材を練りつけ合板で貼ったもの、茶室は、ヒノキの床柱以外は、全て天然カラマツ材を利用 **林業センター**・・・大勢の人が入るところは、止むを得ず鉄骨を利用 **川上村中学校**・・・村有林から 7,000 本を切って、集成加工して利用、廊下は、梁を出して、建築手法を教材として利用、音楽堂は将来、子供達が学校で結婚式ができるよう工夫

この他、**都市型村営住宅、林業者住宅、ゲートボール場**等へカラマツ材を利用している。

村民には、林業センター建設当時から、カラマツの良さを理解してくれるようになった。



写真-3 川上中学校(廊下)

#### ◆森林は屋根のない学校

経済林業が成り立たない状況で、森林・林業の全てを否定するような社会となっているが、森林

は生命維持産業だと思っている。

生産林業がだめでも、それ以外の森林・林業の役割は非常に大きいものがある。都市社会は財貨追求型の経済で、マネーカルチャー中心となっているが、山村や農村には自然が多く、木がその中心にある。人間の人格形成には、知識と知恵が必要である。知識は、教科書や先生が教えてくれるが、知恵は自然の中で教えられる。森林は屋根のない学校や病院と思っている。

#### ◆林業と福祉、教育、文化をセットで

視点を変えて、森林行政等が国家的な位置付けでなされれば、森林・林業は明るい見通しが立つと思われる。

国内林業も木材自給率が 20%越えたとも言われる。食料は 40%前後と上がらないが、林業はやる気になれば、農業以上に自給率が向上できるので、別な角度から林業をみてもらいたい。

今まで生産林業を中心に考えられ、枠組みがなされてきたが、林業を福祉、教育、文化へセットして、いろいろなものに取り組んでいければと思っている。

#### ◆林業の循環と人づくり

中学校建設に村有林を伐採したため、昨年二代目更新を行なった。この植栽を契機に、年寄りの皆さん達が立ち上がり、カラマツの種を県内から求め、播種により良い苗木をつくった。

少しではあるが、村の中で、林業の循環ができてきたことは、ボリュームは小さいが、カラマツ林業に多少の自身が出てきた。

また、中学校をつくるに当たって、植えた人や育てた人に出てもらったり、子供達にも、伐採に立ち会ってもらった。カラマツ 50 年のスパンの中で、素晴らしいストーリーができた。経済とは違った森林づくりを実感できたと思う。

#### ◆地域再生は人である

人はどうゆう形や環境でつくっていくかであるが、単純に学校をカラマツで造ったと言うだけでなく、村の歴史や人間関係などのストーリーのあることが大切である。

森林や林業は、目に見えない大きな潜在能力があると思う。私は、常に、三風原則（風土、風習、風味）を言っている。その地域でしかない特別のものを使っていくべきかと思っている。

農山村には、そうした資源が相当量あるので、それを使っていくことが大事である。

人づくりは、文部科学省で言っている教育もあるが、山村には別の意味での人づくりがある。その村の風土、風習、風味をちゃんと使いこなせる人材をつくることである。先輩達の知恵を引っ張り出して使っていくことが大切である。

#### ◆終わりに

循環資源は、切れば植えればよい訳であるが、その回転率を早めていかなければ、一成皆伐、一成造林といった、戦後の時代のような状態が到来してしまうのではないか。

カラマツは信州を代表する木であり、使い方、方法、行政的な位置付けをしっかりと持って、地域材として銘木に仕立てていかなければならない。

今日お集まりの皆さんと一緒にすばらしい信州林業、信州カラマツをつくり上げていきたい。

### パネル討論会 「カラマツ資源の利用を考える」

#### ◇コーディネーター

植木 達人

(当研究会代表幹事・信州大学農学部教授)

#### ◇パネラー

藤原 忠彦 (川上村長)

小林 健 (北信木材生産センター協同組合参事)

斎藤 敏 (斉藤木材工業(株)会長)

澤柳 由美子 (タクリユウ企画設計事務所)

パネラーには、基調講演の藤原村長の他、カラマツ材の生産・加工・利用の立場から4名の方をお招きし、活発な討論をいただきました。

討論の一部を紹介します。



<植木教授>

長野県のカラマツ林業、木材利用の推進において、何が課題であるか、現場の方々から具体的な提言、考え方をお聞きしたい。

<斎藤会長>

木材はカヤの外に置かれているのではないか。

環境と言われながらCO<sub>2</sub>を削減している林業関係に対して、CO<sub>2</sub>を排出している車にエコだと言って金を出している。木をもっと大切にしても良いのではないか。木材は地球上に残された唯一更新できる資源であり、環境と言うキーワードでやっていくよう考えている。

<澤柳建築士>

私が建材を選択するうえで、木材を使うキッカケは、かなり前になるが、「間伐をしないと使える木が育たず、森林全体がだめになってしまうこと。」「新建材の使用でシックハウスが問題になっていたこと。」から積極的に選択するようになった。自然素材は沢山あるが、木が心身ともにリフレッシュしてくれるので、私の中では木が最高の建材と思っている。

<植木教授>

基調講演のお話から、地域の中で森林を基本材として生かしていく基本的な要件とはどのように理解したらよいか。

<藤原村長>

いろいろあるが、地域の皆さんが自分達で付加価値を高めていく行動を起こすことが大事だと思う。川上村の子供達はカラマツ以外の木を知らない。カラマツのみでは家は建てられないことから「森林のトライアングルの構想」を考え出した。スギの根羽村、ヒノキの大桑村と連携し、各村と2～3haの村有林を交換し、各村にそれぞれの村有林を設定し、公共施設を建てる時には、それぞれの木をどこかへ使おうと協定を結んだ。

<植木教授>

低コストと高性能林業機械を今以上に進めるには、路網と土場のあり方が大変重要になるのではないか。今後、更に生産性を上げるにはどうすればよいか。

<小林参事>

路網を多少長くしても大型トラックの入る現場が必要である。また、民有林で仕事をする場合は、

何人かの森林所有者がいて、その中をまとめて間伐するには、多くの人の山を通ることになり、森林所有者の共同化が第一と考える。

<植木教授>

カラマツを地域の生産工場へ安定供給していくには、いろいろな課題があるかと思われるが、どうあるべきか。

<斎藤会長>

県内市場の充実を図り、ABC材の丸太の仕分けを十分やっていただきたい。特に大口の製材工場へは市場を介して山から直送するなど、しっかりしたルートを整備することが、コストダウンにつながると思われる。丸太価格が上がれば山元へ金は戻るが、私どもも競争で売り買いしており、そう簡単にはいかない。5,000m<sup>3</sup>くらいの公共の建物は、全て木造建築にするような政策が必要である。

<植木教授>

木材が大量に出た場合には、大型工場へ直接流れるパターンが考えられる。地域経済、地元産業の発展を考えると、中小の地元製材工場の位置付けが大変重要と考えられる。

<斎藤会長>

地元の工務店と連携し、地域の製材工場を利用する仕組みをつくっていく必要があり、そのためには、高品質化とコストダウンは元より、安定的に材が流れる木材センターの位置付けが大変重要となる。

<植木教授>

原木市場の役割として、単なる形、大きさだけでなく、強度や含水率など質の面からしても見直しが必要となるのではと思う。

工務店、建築所が地元材のメリットを余り理解されていないのではと感じる。環境面においての有利性を消費者が理解できれば、国産材の利用も増えるのではないか。

<澤柳建築士>

壁材をクロス張り比べると何倍にも高くなるので、腰板とか梁を表に出すなど木材を部分的に利用するなど、木の良い面を消費者に伝えていきたい。

<植木教授>

消費者側と加工側との連携が必要と思うが、加



工面においても地元材のメリットを活かす工夫が必要と思う。

<斎藤会長>

品質の向上とコストダウンが大きな課題である。カラマツ材の利用は、乾燥技術の開発にあったが、更なる技術開発が必要である。

日本集成材工業協同組合の取組み（ハリブリック工法）により、カラマツの耐火性が認められ、金沢や名古屋に5階建ての木造建築物ができています。今日、カラマツが格上げされてきたことは、産官学の連携の賜物と言える。

<植木教授>

国の方針では、新生産システムに大きな動きがある。大量生産から大量消費の流れの中で、地元の材が利用されにくくなるのが想定される。地域の製材工場がまとまり、連携してやっていくなど、地元の製材工場の発展によい方法はないか。

<斎藤会長>

素材生産と製材加工が一緒になって回転している地域もある。品質はある程度管理されているが、コストダウンがうまくできるかが大きな課題である。地域の中で、工務店まで含んだ方法が好ましいのではと思う。

<植木教授>

現場では、低コスト化による施業が進められているが、補助金なしで利益のあるものにするには、大変難しいものがある。現場からみてよい方法があるのか。

<小林参事>

間伐の現場では、補助金頼りである。単純には材木価格が上がることで解決するが、当組合では、1m<sup>3</sup>出すに8,000~12,000円で、材木の価格は8,000~10,000円であるので、そこには、補助金を導入しないと地主にお金を返していけない。

<植木教授>

今までの話の中で、いかに利用を進めていくか、利用しながら山をつくっていくか、循環して回るようなシステムをつくっていくかなければならないと思っている。利用と環境と再生可能な森林資源をいかに統一して引き上げていくのが、我々にとって課せられた課題であると思われる。

まとめるには、難しいテーマであったが、いくつか参考になれば幸いである。

## お 知 ら せ

### 森林とふれあい、様々な体験をしてみませんか？

—平成22年度森林教室の開催—

平成22年度も県民の皆さんが、森林とふれあい様々な体験を通じて、木に親しみを持つとともに、森林について関心を深めていただくために、「森林教室」を開催します。

原則として、土曜日の開催ですが、講座により日曜日も開催します。参加者は、12~40組の参加になります。参加申込みは、開催日の1ヶ月

前から森林学習展示館での受付になります。参加費用は、1組につき100~500円、傷害保険が1名につき20円です。

開催日及び講座内容等の開催詳細については、当所のホームページ及び森林学習展示館（電話0263-52-0600）へお問い合わせ下さい。

#### 林業総合センター創立50周年記念事業が開催されます。

開催期日 平成22年7月22日（木） 開催場所 塩尻市レザンホール  
午後1時~4時30分 内 容 式典・講演・展示発表

記載記事に関する詳しい問い合わせ等は、林業総合センター指導部までお気軽にどうぞ。

〒399-0711 所在地 長野県塩尻市大字片丘5739

TEL 0263-52-0600 FAX 0263-51-1311

URL <http://www.frc.pref.nagano.jp> E-mail [ringyosogo@pref.nagano.lg.jp](mailto:ringyosogo@pref.nagano.lg.jp)